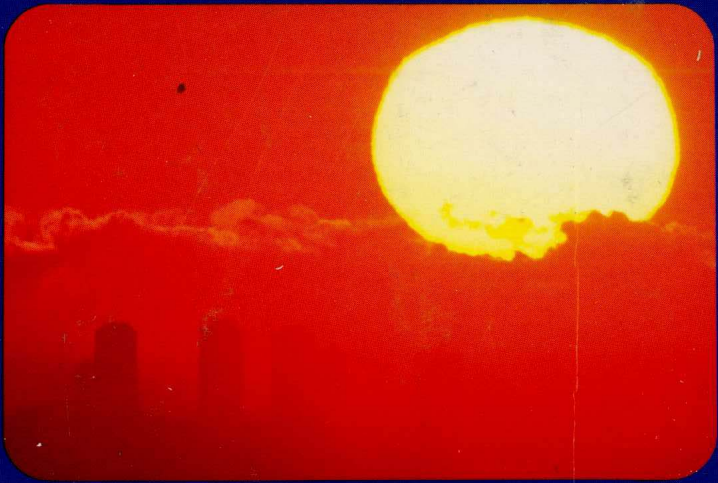
三省堂

小学漢和辞典

第4版

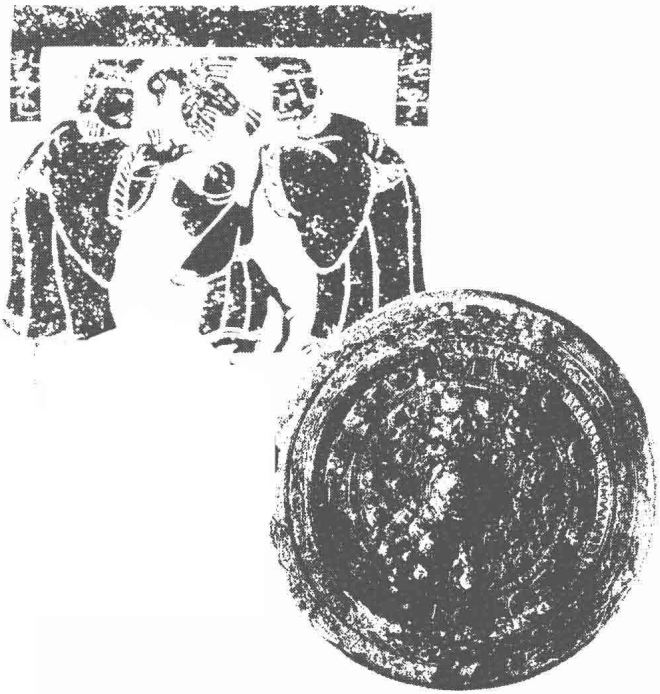
大村はま・長澤規矩也 編



三省堂
小学漢和辞典

第4版

大村はま・長澤規矩也　編



三省堂

© 1981 Sanseido Co., Ltd.
First Edition 1971
Second Edition 1974
Third Edition 1977
Fourth Edition 1981
Made and printed in Japan at the Sanseido Press, Tokyo

編者紹介

大村濱（おおむら　はま）

略　歴　明治39年生。昭和３年，東京女子大学卒業。長野県立諏訪高等女学校教諭。13年，東京府立第八高等女学校(現，八潮高校)教諭。22年，新制中学校発足以来，東京都内諸地域の中学校に勤務。55年，退職。日本国語教育学会理事，日本読書学会理事。

受　賞　昭和35年東京都教育功労賞，38年ペスタロッチ賞，51年読書科学賞，53年日本教育研究連合会賞。

主　著　やさしい国語教室(昭41)・やさしい文章教室(昭43)・やさしい漢字教室(昭44)・ことばの勉強会(昭45)・国語教室の実際(昭45)・みんなの国語研究会(昭46)・教えるということ(昭48)・続やさしい国語教室（昭52)・読書生活指導の実際（昭52)・国語教室おりおりの話(昭53)・学習慣用語句辞典(昭53)・国語教室通信(昭55)・大村はまの国語教室(昭56)など。

長澤規矩也（ながさわ　きくや）

略　歴　明治35年―昭和55年。東京府立第四中学校，第一高等学校を経て，大正15年東京帝国大学文学部支那文学科卒業。在学中，東京外語専修科支那語部・速成科蒙古語部修了。昭和４年東大大学院修了。文学博士。一高教授を経て，法政大学教授。昭和45年退職。同大名誉教授・愛知大学文学部教授・図書館短期大学講師。

専　攻　漢文学・支那文学史・和漢図書学。

受　章　昭和41年紫綬褒章。

主　著　新撰漢和辞典(昭12)・新撰支那時文辞典（昭14)・明解漢和辞典（昭34)・三省堂新漢和中辞典（昭42)・携帯漢和中辞典（昭44)・三省堂漢和辞典(昭46)・支那學術文藝史(昭13･23)・支那文學概觀(昭26)・漢文学概論（昭34)・書誌學論考（昭12)・和漢書の印刷とその歴史(昭27)・書誌學序説(昭35)・古書のはなし(昭51)・江戸地誌解説稿(昭７）その他和漢書の各種目録を含めて数十部。

はしがき

戦前のような漢文科は中学にも高校にもないし、むずかしい漢字は使わなくなったから、今日の学校教育では、漢和辞典はいらなくなったという声を聞くが、世間では、今でも当用漢字外の漢字が使われる。地名や姓名の中には、当用漢字外の漢字が使われているし、テレビの画面にも、当用漢字音訓表に出ていない漢字や発音が出る。国語教育の内容がやさしくなればなっただけ、読めない漢字、書けない漢字が多くなってきた。読めない漢字がはいっている文章を理解するためには、国語辞典だけではどうにもならない。かなで引けないからである。

小学生の読み物には、小学生なりに読めない漢字があるから、小学生にとっても、国語辞典のほかに漢和辞典が必要であるが、専門家がほんとうにみずから手がけた小学生用の辞典がないゆえ、ぜひ作ってほしいと、現場の先生がたからせがまれていた。そこで、これに応ずる漢和辞典を作ってみようと、大村さんと話し合ってから、早くも十年になる。引きやすい、わかりやすい、使いやすい、そして役にたつ……などの点を考えぬいて、自然にことばの力のつくように作り上げたのが本書である。両人の四十年にわたる辞書作成や教員生活の体験の成果を見てほしいと思う。親字は三省堂既刊の漢和辞典に取材したが、熟語はまったく別に取材したところがあり、いろいろの点で、はじめて辞書を使う小学校の上級生が、中学にはいっても使えるようにくふうしたつもりである。

最後に、「なりたち」の初稿を作ってくださった清田清君、大村さんを助けた吉田恵美子さん、終始献身

的に原稿を整理してくれた、三省堂の松村武久君、ならびに志岐ちづ女、その他、校正を手伝ってくださった諸君、製版印刷に努力してくださった図書印刷沼津工場の各氏に深く感謝する。

昭和四十六年十一月　　沼津工場校正室で　長澤規矩也

この「小学漢和辞典 第四版」は、第三版のものに、昭和五十六年十月に発表された常用漢字表・人名用漢字別表によって必要となった改訂を行ったものである。

元来、本書は広く子どもの文字環境に留意して、当用漢字以外の漢字をも、子どもが出会う漢字――見たり聞いたりすることばを書き表す漢字――は、とり上げてきたので、今回の常用漢字表・人名用漢字別表による影響は少なかったが、なお、子どもの見聞する範囲の漢字はとり上げる方針は引きつづき生かしている。

改訂にあたっては、吉田恵美子さんの協力が大きかった。また、三省堂国語辞書出版部の方々をはじめ、御協力下さったすべての皆様に深く感謝申し上げる。

昭和五十六年十二月八日　　大村はま

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

辞書の使い方

——特に先生・父兄の方々に——

一　辞書の種類

辞典・字典・事典　一口に辞書といいますが、その中にはいろいろあります。

辞典と辞書とはまったく同じですが、はっきりいいますと、辞典と字典（字書）とは少し違います。**辞典**とはことばを説明したものでありますし、**字典**とは文字を説明したものであります。しかし、この二語は混同して使われていることもあります。

ところが、**事典**というものは、辞典とは違って、ことばを説明したものではなく、事がらを説明したものであります。

ですから、ことばを調べるときには、辞書・辞典を使い、ある事がらについて調べたいときは事典を使うのです。

辞典の種類　次に、ことばを説明した辞典にもいろいろあります。その一つは外国語と自国語とを対訳したもので、それにも、外国語から自国語を引き出すときに使うものと、自国語から外国語を引き出すときに使うものとあります。わが国の場合、英和辞典・仏和辞典・独和辞典は前者で、和英辞典・和仏辞典・和独辞典は後者です。

その二は古語から現代語を引き出すときに使うものです。これは古語辞典というものです。明治のころまでは、この逆の現代語から古語（雅語）を引き出す辞典もありましたが、今は古文をまねて作るということがなくなりましたので、こういう辞典はありません。

その三は現代に使われるむずかしいことばを、現代のやさしいことばに直すときに使うものです。

今、みなさんがお使いになっている国語辞典は、だいたい、この「その三」のようなもので、五十音順に、ことばを並べたものであります。

漢和辞典　では、漢和辞典とはどういうものでしょうか。「その一」のような、漢語から国語を引き出すためのものでしょうか。ほんとうの漢和辞典というものは、そういうものでなければなりません。それでこそ「漢和辞典」なのです。ところが、今日使われている「漢和辞典」はみなといってもよいくらい、そうではないのです。では、どういうものなのでしょうか。そのお話をする前に、漢語というものについてお話ししなければなりません。

漢語と国語　漢語というと、本来は、共和国で使われる、あるいはシナで使われたことばでなければなりません。ところが、その中には、わが国に伝わって、同じような意味で使われてきたものもありますが、また、もとの意味とは違った意味で使われるようになったものがあります。これは、漢字の一字一字についてもそうでありますし、二字・三字と漢字を合わせて作ったことば——これを**熟語**とよびます——についてもそうであります。

このように、わが国で意味が変わった漢語は、正しくいうと漢語ではありません。わが国の国語です。そればかりか、もとと同じ意味で使われている漢語も、わが国で日本語の中に使わ

れている限りでは、やはり国語といえます。さらによく調べてみますと、われわれが漢語だとばかり思っている熟語の中には、共和国人にまったく通じないことばがあるのです。かなが一字もはいっていませんので、見たところでは漢語のようにお考えでしょうが、悪役・映画・食塩・宴会……みんな日本語を知らない共和国人にはさっぱりわかりません。スポーツのニュースの中に使われる「辛勝・惜敗」などはもちろん、「野球」も、「庭球」も、「試合」もみんなわが国で作られたことばです。みんな国語なのです。

漢和辞典の性質　では、どうしてこんなことになったのでしょうか。ひとつ、考えてみようではありませんか。

それはなんでもありません。漢字にはふしぎな力があって、その二つ三つを並べると、いとも簡単に、簡潔な新語ができるからです。ですから、共和国でもどしどし新語ができているのです。それに、かな書きのことばよりも、漢字だけのことばのほうが、聞く人にはなんとなく力強く感じられますし、おもおもしくも感じられるのです。それで、一方では漢字制限が叫ばれています今日、逆に、漢字だけの新語がふえてきています。そればかりではありません。みなさんは、どういう漢字で書くものかご存じないことばを、日常会話の中でお使いになっているではありませんか。しかし、そういう漢字ばかりのことばのほんとうの意味を知りたいときには、漢字で書いてあると、今日の教育を受けた人は、読むことができませんから、国語辞書では引けないのです。そこで、国語辞書の中には、漢字の一字ずつを特に出して、その発音や意味をしるしたものが出ていますが、一字一字の発音は一様ではありませんので、いろいろ読みかえては国語辞書の中をなんべんも引き直さなければなりません。こういう必要が生じたときに利用するものが今日の漢和辞典です。漢和辞典では、どう発音されることばでも、同じ漢字でしるされているものや、同じ漢字が頭についている熟語は、みんな一つところにまとまっていますので、なんべんも引き直す必要はありません。ですから、今日の漢和辞典というものは、英和辞典などのように、外国語から日本語を引き出すものではなくて、読めない漢字でできている日本語を容易に引き出して、そしてそのことばの意味を知ることができるようになっていなければいけません。英和辞典などとはまったく性質が違うのです。

二　漢和辞典の組み立て

漢和辞典の構成　では、漢和辞典というものは、どういうふうに組み立てられているものかということについて書いてみましょう。

今の漢和辞典には、漢字一字一字の形や発音や意味ばかりでなく、熟語の発音や意味もはいっています。この場合、一字一字の漢字は特に大きくしるされ、普通、これを**親字**とよびます。次に、その親字を頭字とする熟語が並んでいます。

親字のところには、まず、その親字とまったく同じで、正字・俗字・略字など字形が違っているものが下に並んでいます。その次に、「音」「訓」と表示されたおのおのの下に並べられたかな書きが、その親字の発音、すなわち読みであります。**音**というのは、その漢字がわが国に伝わったときの発音に近いもので

す。「近い」といいますのは、漢民族が発音したとおりには、朝鮮民族・日本民族は必ずしも発音できませんし、朝鮮民族の発音どおりには日本民族は必ずしも発音しかねたからです。**訓**というのはそれまで文字というものを持たなかったわが民族が、はじめて文字というものを見て、これは便利であると考え、やがて、漢字の発音や意味をかりて、国語を写すようにしたのです。このときに、漢字の一字一字にあてた国語の単語が「訓」なのです。この「訓」は漢字本来の意味と一致するのが当然なのですが、中には、事物のあるなし、違い、または細分しているかいないかなどによって、訓が本来の意味と違っている場合もあります。そのように、漢字本来の意味と違う訓を**国訓**とよび、辞書によっては、これを「国訓」または「日」と表示しています。

熟語のところには、かなで読みをしるし、その下に意味がしるされています。

部首というもの　さて、その次は、その親字や熟語の並べ方です。

普通、漢和辞典は「部首」別に並べてあります。この**部首**というものは、多くの漢字の中からいくとおりかの共通部分を取り出してまとめてある、その共通部分のことです。ところで、この部首というものが昔から決まっていて、各部首所属の各字とも変えることはできないと思っている人が多いようですが、決してそういうものではありません。明治以後の漢和辞典の部首は、中華民国の前の清朝のはじめのころ、天子の命によってできた康熙字典の部首によったものでして、康熙字典は、さらに清の前の、明朝の終わり近いころできた字彙という字書によったもので、それ以前にはこういう部首ではなかったのです。したがって、絶対に変えてはいけないというものではなく、また、永久にこれを守らなければならないという性質のものではありません。

おのおのの漢字がどの部首に所属しているか、みてみましょう。それには、その前に漢字の成り立ちについて考えてみる必要があります。

多くの漢字は、左右か上下かに二分できるものです。左右に二分したとき、左半分を**偏**（扁とも書く）といい、右半分を**旁**とよび、上下に二分したとき、上半分を**冠**といい、下半分を**脚**とよびます。中には、左右にも上下にも分けられないものがあります。漢字がどの部首に所属しているかは、たいていい偏か冠か、全体（二分できない漢字）かで決められます。ところが、二分しようとすればできるのに、その字の全体を部首としているものがあります。たとえば辛・音・香・鼠・鼻・歯などです。これは、この字の全体を偏や冠とした字があるからです。それなら、乃・古・巛・夷・爻などという部首はなぜないのでしょうか。それが単独に一字として使われないというのでしたら、部首にある亅・亅・儿・冖などは、ほとんど単独には使われないではありませんか。

このような不合理な点はほかにもたくさんあります。イが人部、刂が刀部、忄が心部、扌が手部、氵が水部、灬が火部、犭が犬部、阝（右）が邑部、阝（左）が阜部にはいるという約束ごとがあります。

しかも一方では、匚と匚、土と士、日と曰、月と月（肉部）が二つの部首に分かれています。

それもまあよいでしょう。欠・殳・邑・里・舛・隶などの部首に属した漢字で、部首と同じ形が偏や冠にあるものはほとんどありません。古・召・台・各・吉などが口に、忌・思・息・恥・悲などが心に、問が口に、聞が耳に属していることはおかしいようですが、それぞれ、口・心・口・耳に関係があるからで、相が木になくて、目部に属していますのは、木に登るとよく見えるという意味によったものであります。ですから、漢字の意味がわからないから漢和辞典で調べようとするときには、意味を知らなければ引けない伝統の所属部首というものは、役にたちません。

配列法の変遷　そのため、民国以来、あちらでも、字典の配列法を根本的に改め、丶・一・ノなどと運筆法によって分ける方法もでき、中には、その運筆法を数字化して、数字で引く方法も、その後行われています。漢字の構成がわからない西洋人には向きましょう。

わが国にはかなというものがあります。そこで、わが国の漢和辞典では、引きにくいこの部首引きを、字音のかな引きに改めて並べるという方法が、大正以来ある程度広まりました。しかし、字音には、九キュウ・京ケイ・人ジン・女ジョ・定ジョウ・工コウ・極キョク・楽ガク・正セイ・歩ホ・物モツ・白ビャク…などのように二種以上の音を持つものがかなりありますので、どれから引くかと迷うものもあり、それは両方に出すという方法がとれますが、今では、利用者が音を知らないために、まったく引けなくなったものもあります。

総画索引　一方では、所属部首を推定しにくい字の検索のため、総画数（全部の字画の合計数）順に並べた総画索引を巻首に置くという方法が清代以来あります。しかし、十画前後の漢字が非常に多く、しかも、同一画数の中がまた辞書のページ順に並べてありますので、この中から、捜し出すことは容易ではありません。そこで、本書では、筆法別の新式の総画索引を加え、筆順の第一画の筆の運び方から検索できるようにしました。

音訓索引　わが国では、明治以来、巻末に、漢字の音からでも訓からでも引ける、音訓索引という検索法が考え出されました。これは、求める字をさがし出すためだけではなく、同じ音の字にどのような漢字があるか、同じ訓の字にどのような漢字があるかを調べるときに利用することもできます。

熟語の配列法　親字のあとに熟語を並べるという構成はわが国で作られたものです。三省堂の古い「漢和大字典」（明治三十六年発行）が最初かと思います。あの本では今とは逆に、親字を下にした熟語が並んでいます。それは、漢詩を作る人がまだかなりいましたから、その人たちの便利を考えたのでしょう。明治末年以来は今のようになりました。それも、はじめは、その順序を第二字の総画順にしてありましたが、音訓索引と平行して、五十音順をとる辞書が多くなりました。この点についても、利用者の読めない漢字が多くなった今日では、前へもどして、総画順にするほうが利用度が高くなりましょう。

字源の説明　戦後の教育では、暗記をさけて、理論的に学習すべきことが叫ばれていました。ところが、漢字学習についてのみはドリル、ドリルでした。そこで、わたくしが文部省の学習指導委員でありましたころ、少し字源をとり入れるべきだと言い出しましたが、それは、字の構造を覚えるのにつごうがよいもののみについて字源を教えることを主張したのです。その

薬がききすぎまして、すべて漢字に字源の説明がいると誤解されてきたようです。二つの字を合わせて作られた漢字の説明では、その二つの字の音または意味を知っていない限りは無意味でしょう。

三　この辞典の長所

親字の選び方　なにを選ぶときでも、たくさんの中から選び出すことはむずかしいものです。たとえば、服を選ぶとき、大小長短とりまぜた中から、子どもの身長や好みに合うものを捜し出すことは非常にむずかしいものです。ですから、お店では、なん歳からなん歳向きというように、お客が選びやすいように分けて並べてあります。

漢和辞典の親字にしても同じことです。たくさんあると便利なようですが、利用者が引くこともない、むずかしい漢字まではいっていますと、捜すのにほねがおれます。そうかといって、いつもいるものばかりでなく、多少は範囲を広げておきませんと、これまた利用価値が減ります。三省堂では漢和辞典をそのために何種か作って、小学生・中学生・高校生・社会人・大学生にぴったり合うような内容をと心がけています。

この辞典の場合は、「明解漢和辞典」の中から大村さんが親字を選び出し、わたくしが、木・虫・魚・鳥などについて少しふやしました。

親字の並べ方　普通の漢和辞典の並べ方は、部首によって分けられていますが、その部首というものはまったく便宜上のもので、大多数の利用者にとっては、むしろ根本的に引きにくい構成になっていることは、すでにしるしたとおりです。

わたくしは、大正時代に小学校から大学まで学びました。中学校では、一年生のときから学校で漢和辞典を引かされ、当時の漢和辞典の引きにくさを体験し、上級生になってからは、引きにくい漢字の表などを作っていました。一高に入学し、将来漢文を専攻しようと決めましたとき、祖父から、いつか漢和辞典を作ってみよと言われましたので、その引きにくい漢字を、どの部首に入れたら適当であろうかと考えるようになり、このことは大学を出て、一高の教師になっても忘れることができませんでした。

一時、教師をやめて著述家になろうと決心したことがあります。そのとき、三省堂から改良した漢和辞典を作ってくれと頼まれました。そこで、昭和九年から十一年の終わりまでかけて、「新撰セン漢和辭典」という当時の中女学校生の学習にぴったり合う辞書を作り、それに、年来考えていた新しい配列法を実行いたしました。意味を知らなくても、見たままで引けるように部首をふやしたり、所属部首を変えたりしたのです。

それから四十年近く、いつもこの並べ方、引き方を考えつづけ、数種の漢和を作り、改良を心がけてきました。その基礎となりましたものは「新撰漢和」ですが、終始一貫して、わたくしが目を通しています。あるものはわたくしが先に筆をとって協力者に訂正をこい、あるものはその逆の方法をとりました。

親字について　この辞典はもっぱら小学上級生用として作りましたが、上級生が十分利用できるようにと、少し範囲を広げました。もちろん小・中学生にはまったく必要がない「読み」や「意味」はできるだけ省きましたが、一方では、高校以上の利

用者にはわかりきっていることがらでも、小・中学生には必要と思われるものを入れました。

親字の上の画数は総画数から部首の画数を引いたもので、親字の字形は小学校の教科書に使われているもの（教科書体、略して教体といい、また書くときの字形ですから筆写体ともいいます）を出しましたが、常用漢字以外の漢字は、教科書体は印刷には使われないのが原則ですから、活字体（明朝体）にしました。親字や熟語の中に使われている漢字も、すべてこの方法によりましたので、字形によって常用漢字かそうでないかが一見してすぐわかるようにしたことは、この漢和辞典ではじめて試みたことと思います。親字の上下に【下】のように、【　】を加えたものは、「下」が常用漢字であることを示し、『兎』のように、『　』を加えたものは「兎」が常用漢字外であることを示します。小学校用の辞典に常用漢字外の漢字を入れる必要はないとお思いの方もありましょうが、今の児童は、テレビや広告で、常用漢字外の漢字に接することが多いので、大村さんと相談して加えたのです。

親字の下の何年という文字は、昭和五十五年四月から実施された「小学校学習指導要領」別表の「学年別漢字配当表」による、配当学年です。その下に、常用漢字は特に活字体をしるしました。さらに、その下に「音」「訓」をあげましたが、音はあまり使われないものを略し、訓は、次の「いみ」にあげてあるものの中から、さらに代表的なものを選びました。音はかたかな、訓はひらがな、漢字に置きかえて使えるものは、太文字にしました。音や訓の中で、読みの横に縦線があるものは、特別なことばの読みに使われるものです。〔　〕の中の読みは、音訓を転用して使ってよいといわれているものです。

「かきかた」はいわゆる筆順です。これは学習漢字の範囲にしました。そのほかは、これでたいてい応用できます。筆順を黒と赤とわざわざ二色にしなくても、これでわかります。

「送りがな」は常用漢字で訓が認められているものについて、動詞・形容詞の活用の例などをあげて送りがなを示し、生徒の作文に役だつようにいたしました。

「いみ」の中には訓と漢字本来の字義をあげました。この場合、現代表記法で漢字に置きかえることのできる部分は太文字のかたかな、現代表記法で認められていないものは明朝（なみ字）のかたかなにしました。同じ訓でありながら、前に太文字でしるされているのと同じことばが、明朝でまた出ているものは、そういういみで使われるときはかな書きにするしるしです。なお、字音によって字訓字義が違う場合は、①②③…で区別しました。

「名まえ」の下の読みは、普通の音訓のほかに、子どもの名に使える読み方です。

熟語について　小・中学生の生活に直結するものを基準にしました。かながはいる熟語は原則として除きましたが、戦前にかなを入れずに使われていたものは収録し、その下に〻を加えて、今の書き表し方を示しました。〻の下は昔の表記法です。

熟語は、第二字の総画数順に並べました。熟語の上下の【　】は現代表記法でそのとおり漢字で書けるもの、『　』は書けないもので、読みがなは熟語の下に二行につけてあります。このとき、二種以上の意味のあるものは、㊀㊁㊂で分け、読みが同じでないものがあるときは、読みがなを熟語の下から㊀㊁㊂の下

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

に移してあります。この場合、読みによっては漢字で書けないとき熟語の上下を【　】で囲みました。

「例」と「用例」とはこの辞書で特に力を入れたところです。例は、その熟語を使った語、用例は文例をあげ、作文の参考になるようなものをとりました。

「参考」のところに、その熟語の使い方をあげ、「注意」のところに書き誤りの実例を示して、書くときに誤らないように注意していただくことにしました。

熟語のあとに、学習漢字の範囲内で、その親字が下にくる熟語を列挙しました。

用字用語について　普通の辞書は「ことば直し」に力を入れすぎて、利用者にはわかりにくい古語廃語も語釈中に入れていますが、子どもは漢字は知らないが、意外に、漢語・準漢語（日本製の熟語）を使っているものです。やさしそうに見える、かな書きの純粋の和語よりも、字は書けないが、ことばは知っている漢語・準漢語がかなり多いものです。そこで、今回は編者両人合意のうえ、そういうことばは読みがなを付けて使いました。これも本辞典の新特色でしょう。その他、本文については、学年配当表の四年以上の分に読みがなをつけましたが、同一親字の中や、熟語では近所と重出しているものは略しました。

音訓索引　巻末の「音訓索引」は、利用者の要望に応え、常用漢字以外の漢字の音訓もとりあげ、学習漢字・常用漢字・人名用漢字・常用漢字外の漢字の区別ができるようにしました。

最後に　世上の小学生用の漢和辞典では、収録親字を機械的に学習漢字・常用漢字などの範囲にして、個人差はまったく考えられていません。本辞典はこの点にも留意して、常用漢字以外の漢字も、生徒の生活に関連があると思えるものは、これを入れました。

昭和四十六年十月

長澤規矩也

一見、小学生にはいらないのではないかと考えられるような漢字漢語もはいっているが、現在の学校生活で、教科書その他に出てくるものだけでなく、子どもたちがその多様化した生活のなかで、目に触れ耳に聞くものはあえて取り上げるようにした。
スポーツを楽しみながら、負けかかったチームに声援を送るのに、「バンカイ、バンカイ（挽回）」と叫ぶ子どもたちである。
ただ音として子どもたちのなかにはいっている漢語なども取り上げた理由はここにある。
（大村はま）

辞書で学ぶこどもたちの声

――こんなときに辞書を使った――

この学級で、みんなが漢字の辞書を使って勉強するようになってから、もう一年近くなります。それまで、みんなは、読みかたがわからないといっては、わたしにたずね、書きかたをわすれたといっては、わたしにたずねていました。それが、辞書を持つようになってから、じぶんで、どんどん調べるようになりました。じぶんで調べる楽しみを知りました。そして、辞書は、じぶんたちの思っていたより、もっといろいろなことを教えてくれるといって、大喜びです。きょうは、みんなが集まって、辞書がどんなときに、どんなことを教えてくれたか、どんなときに使って助かったか、どんなときにどんな発見をしたか、いろいろのことを話し合っています。この辞書を使うみなさんも、きっと、この子どもたちといっしょに、辞書を使うことのねうち、その楽しみをそうだ、そうだといってくれるでしょう。

司会　では、きょうは、漢和辞書のほうのお話をしましょう。こんなときに使った、こんなことがわかった、というようなお話から、どんどん出してください。

▽　ぼくね、ラジオを聞いていたとき、アナウンサーが、お琴の演奏家というのか、お琴をひく先生を紹介して、「日本音楽には、どの方面にも堪能でいらっしゃいますが…」と言ったとき、それが「カンノウ」と言ったか、「タンノウ」と言ったか聞きとれなくてね。ぼくは「タンノウ」がいいような気がしたけれど、アナウンサーのは、どっちかといえば、「カンノウ」に近かったような気がして、わからなくなりました。気になるから、うちへ帰って調べてみたら、やっぱり「堪」に「カン」で、「堪能」は「カンノウ」、おまけに「タン」と読むのはあやまり」とあって、はっきりしました。

▽　わたしもテレビなんか見ているとき、ニュースなんかでも、出てきたことばを調べることがよくあります。このあいだも、テレビで、字が……遊説中の……と出たのです。アナウンサーが「ユウゼイチュウ」と言いました。わたしは、「小説」の「説」だし、「説明」の「説」だし、「セツ」にきまってると思いました。言いまちがえたか、発音のかげんかな、と思いました。まあ、念のためと思って、「遊」のところをあけて熟語をさがしてみましたら、びっくりしました。やっぱり、めったなことではアナウンサーはまちがわないものだなと思いました。「ユウゼイ」だったのです。

▽　わたしのは、調べてみたら、どっちでもいいということがわかって、すっきりした例ですが。「老若」というのを、「ロウジャク」かな、「ロウニャク」かなと、前からときどき気になっていたのです。それでも調べもせずに、このことばが出てくるたびに、ちょっと気になりながら、ぶしょうをしていたのです。やっと今度調べてみたら、どっちでもいいのでした。なんだか、ほっと安心しました。

司会　今度は、意味を調べた例を少し出してください。

▽　はい。わたし、このあいだ、奈良の壁画のお話を先生に

お聞きしたとき、先生が、そのすぐれていること、美しいことをいろいろ話してくださって、「極彩色サイシキ」の壁画と黒板にお書きになったでしょう。わたしは、「極彩色」というのは、けばけばしくて、はでなこと、くどいことと思っていたので、へんな気がしたのです。昔ムカシの人は、そういうくどい色が好スきだったのかなとか、中国から技術ギジュツが伝ツたえられた話も思い出して、どうもわからなかったのです。先生にお聞きしようかと思ったけれど、やめてまず辞書を引きました。そうしたら、わたしの「極彩色」の解釈カイシャクはまるで違チがっていました。これは「ひじょうに手のこんだ美しい色どり」ということでした。しかし、二つめの意味に、わたしのようなのもありました。手のこんだ美しさが、度がすぎると、わたしの思っていたようになることがあるのだなと思いました。わたしのも、まったくまちがいでもなかったけれど、もとの意味のほうをわすれてしまっていたのです。

▽　このあいだ、あやめとしょうぶの異イ同を調べるということしたでしょう。あのとき、ぼくね、一、異コトなるところ、二、同じところと、上下二段ダンに分けて、気がついたことを書き始めたのです。そうしたら、一のほうは、どんどん書けたけれど、二のほうは、なんだか書きにくくて、いっこう進まないんです。いっしょうけんめい考えていたら、先生が、「まだか」とおっしゃってね、ぼくのを見て、それは、「一だけでいいよ」ですって。そして、みんなに向かって、「ちがうところと同じところと分けて書いている者があるが、そういうときは、ちがっているところだけでいいんだ。「異同」というのは、「ちがい」ということ。下の「同」は、ついているだけだ」と言われました。ぼくは、なんだか、ふにおちないので、あとで辞書で調べてみたら、やっぱり先生のお話のとおりでした。

司会　文章を書くときにも、ずいぶん使ったでしょう。

▽　はい、わたしは、このほうが多かったくらいです。展覧ランン会のとき、掲示ケイジ係をしたでしょう、「休憩ケイ室」と書くとき、舌の次、白か自かわからなくて辞書のおせわになりました。

▽　作文を書くとき、「食料リョウ品店」と書くとき「食糧リョウ品店」なのかなという気がして、辞書を引いてみて、意味のちがいがわかりました。わたしはかんづめなどを売っている店のことを書いていたので、安心して「料」のほうを使いました。

▽　ぼくは、「共ウキョウ同」と「協ウキョウ同」と、どっちを使おうかとまよったことがありました。そうだ、と気づいて、辞書で見たらよくわかりました。先に「共」のほうを引いたのですが、「共同」の用い方の例がありましたし、とくに、「注意」として、「力をあわせて助けあって仕事をするときは「協同」を使う」とありました。漢和辞書はこういうときに役だつものだと、ありがたみがつくづくわかりました。

▽　意味がわかっていても、使い方がわからなくて引いたことも、たびたびあります。先生に、ことばが合わないといわれて、辞書で調べて直したことがずいぶんあります。同じように、木でつくってあっても、本だなどは「木製セイ」だけれど、家とか、橋とかは「木造ゾウ」なのだということや、同じ受け取るでも、「受理」というのは、公式の書類ルイなどを受け取ることなのだ、というようなこと、みんな、辞書に書いてあって、ぼくは、ほんとに、辞書のありがたさが身にしみています。

「注意」というところを読んだり、用例を見たりすると、いろ

▽　ほんとにそうです。「発起人」の読みを確かめようと思って見ているうちに「発達ツ」ということばに目がとまりました。「発達」なんて、知っているつもりでしたが、見てほんとによかったのです。「発達」が、二つの意味になっていました。「進歩する」というのと、「成セ長する」というのです。「文化の発達」が前の例で、「心身の発達」があとのほうの例でしたが、私は、この分けかたを見て、ほんとうに考えてしまいました。ほんとにそうです。「発達」といっても、このようにとらえてこそはっきりしますし、ことばがゆたかになる、わたしのことばの持ち物が、ふえたような気がしました。

▽　そういうこと、ぼくもあります。これは、ぼくが気がついたのではなくて、先生に言われて気がついたのですけれど、「曲折ツセ」ということばを引いたときです。「おれ曲がる」とか、「まがりくねる」という意味の例に、「曲折した山道」とあって、もう一つの意味の「こみいっている」というような意味のほうには「いろいろな曲折を経ヘて……」という例があったのです。先生の教えてくださったことは、前の意味のときには、「曲折する」「曲折した」というように使い、あとの意味となると、その使い方が変カわって「曲折を経る」とか、「曲折がある」とかいう使いかたになるのだということです。

辞書は、生かして使うものだよ、と言われました。

司会　辞書を使って、何か研究をまとめたという人がありましたね。「真」という字の意味でしたか、使われかたですね。

▽　はい。この研究の動機キは、おばさんといっしょに公園に行って、池のコイを見ていたとき、おばさんが、マゴイのことを、「ヒゴイもきれいだけれど、こういうのが、マゴイ(真鯉)で、ほんとのコイでしょうね」と言われたからです。「ほんとのコイって言ったけれど、〝うそのコイ〟があるの？」と、りくつっぽい質シ問をして、おばさんに、「うそ、ほんと」の「ほんと」ではない、「もとからある」「あたりまえの」「ふつうの」という意味だと教えてもらったのです。それで、「真」という字のいろいろの意味を調べることになったのです。「ま」と読んでいるときも「シン」と読んでいるときもあるけれど、とにかく「真」の字のついていることばを集めました。そして、それを、そのつけ加クわえている意味とか、はたらきで分類したのですが、そのとき、辞書の「真」という漢字の意味をくわしく述ノべてあったのが、ほんとうに役にたちました。ぼくが、これだけは一種ジ類とは気がついても、それが、どんな意味とも、どんなはたらきをしているともいえないのが、ほんとによく言い表されていて、むねがすくようでした。「まじりけなし」という意味をつけ加えているのや「正確カク」という意味を加えているのや、いろいろありました。「真清水しみず」というのがあって、「真鯉」の「ま」とちがうような、しかし、なんといっていいかわからなかったのですが、これは一種のかざりで、きれいにひびかせるためだとわかって、ほんとにそうだなと思いました。

司会　辞書はほんとうに役にたちますし、おもしろいものですね。また、次にこんな話し合いをするまで、どうぞしっかりと辞書を活用してください。

（大　村　は　ま）

辞書の引き方

――特にこの辞書を使う方に――

一　親字の引き方

部首の見方　みなさんがものをお読みになるとき、一字の漢字の読み方や意味がわからない場合は国語辞典では解決できないでしょう。このときに漢和辞典を使います。

まず、漢字が、左右か、上下かに分けられるかどうか考えてみます。分けられたら、左半分か、上半分かが、表紙裏か、カードかの「部首索引」にあるかどうかさがしてみます。ただし、左半分か、上半分かが部首になくて、右半分か、下半分かに＊じるしのついた部首があればそこで引きます。この部首は左半分や上半分よりも、右半分か下半分にくる例が多いので例外部首としました。

例一　【休】　左右に分けるとイと木とになります。イを「部首索引」の二画の中でさがして、一一三ページから始まっていることを知り、木が四画ですから、一一八ページにさがしあてます。【休】字の上の4画という数字がイ部の4画であることをしめします。なお、画数の変わりめは見やすいように太字の数字にしてあります。

「休」は常用漢字ですから、上下は【　】、その下の1年は、教育漢字では一年生でおぼえることになっている字です。その下の「休」が活字体です。

音 **キュウ**、訓 **やすむ**　は常用漢字表にある読み方で、太い文字の部分は「休む」と漢字でも書けることをしめします。「やーめる」とあるのは、「や」が太い文字でありませんから、現代表記では漢字が使えないわけですが、もとは漢字を使ったことをしめします。

親字の上下の記号が『　』になっている漢字は常用漢字外のものです。

つぎの かきかた の下は筆順です。

なりたち は字源すなわち、漢字がどのようにしてできたかの説明で、「人が木のかげで休む」という、この字のなりたちを知っていると、「やすむ」という漢字の形がたやすくおぼえられます。

送りがな は、「休まない」ということばを書くときには「ま」から、「休み」は「み」からかな書きにすることをしめします。

いみ の中で、太い文字がはいった「**ヤス**む」「**ヤス**める」「**ヤス**まる」「**ヤス**み」は、現代表記でその部分が漢字が使えることを表し、「やめる」は今は使えませんが、もとは漢字を使ったことをしめします。「**ヤス**む」の下の㋐㋑㋒㋓は、休むと読むときの四種の意味を分けて説明したものです。

名まえ の下は、子どもの名をつけるとき、使われる読み方で、常用漢字以外でとくに人名に使ってもよいものは親字の下に「人名」としるしました。みなさんの名まえはこういうところに出ています。

例二　【方】　この字は左右には分けられません。上下に分けて、一を七九ページに見つけ、方をその二画のところの八一ページに見つけます。

例三　【悪】　この字は上半分が部首になく、心が下から引く

*じるしの部首ですから、心で引きます。

例四【親】左右に二分することはできますが、左半分が部首にないので、その上半分の立から引きます。

例五【啓】上下に二分できますが、上半分が部首になく、「口」は*じるしのつく例外部首ではないので、上の一部分の戸から引きます。

例六【米】上下にも左右にも二分できませんので、全部すなわち米のところで引きます。

他の部首からも引ける　以上の部首の見つけ方は原則によったものですが、悪は一からでも、親は見からでも、啓は口からでも引けるようにどちらにも出していますので、部首をあてそこなっても、引き出せないことはまずありません。こういうときにはやや小さい活字でしるし、原則ゾクによる場所のページ数を記入しておきました。

画の数え方　画数は、つづけて書く部分は一画に数えるのですが、つづけて書くか、はなして書くか、この二つを分けるということはやさしいようでむずかしいものです。まして、まだ習ったことがない漢字になりますと、いっそう苦しいものです。ですから、この辞書では、とにかく曲がったら一画と数えても引けるようにしてあります。

音と訓　音も訓も漢字の読みではありますが、音とは、漢字がつたわってきたときのもともとの発音に近いもので、訓とは、わが国でその漢字にあてた国語の単語タンゴです。漢字の字形にならって、わが国で作った字を国字といい、したがって、国字には音がないのが当然ですが、「働ドウ」のように、音までわが国で作ったものがあります。また、茶ヤチ・菊クキのように、わが国に伝来デンしたもので、わが国で訓を作らなかったものもまれにはあります。

筆順というもの　かきかたは筆順のことです。筆順とは、整ったきれいな文字を書くには、どういう順序ジュンで書くのがうまくいくかという、長い間の経験ケイケンにもとづくもので、その順序は絶対的ゼッタイテキのものではありません。いわば、便宜ベンギ的なものですが、みなさんも、この順に書くと、きれいな字が書けますよ。

二　熟語の引き方

熟語とは　二字三字の漢字を組み合わせて新しい意味のことばになったものを熟語ジュクゴといいます。しかし、ただ、かってに組み合わせても熟語にはなりません。上におくか、下におくか、いろいろなきまりがあるのです。近ごろ、このきまりにはずれた新語がマスコミなどの間から生まれてきていますが、なげかわしいことです。これも、漢字に関カンする知識チシキがあさくなったからでしょう。

熟語のならべ方　熟語はすべて第一字の親字のところで引き出してください。同じ親字のところの熟語は、第二字の総画数の順序ジュンでさがしてください。

この熟語のえらび方にも苦心しました。あまりたくさんあっても引き出しにくいものですから、みなさんがいりそうなものを主としました。また、一つしか読みがなくて、しかもあまりにもやさしいものは親字の下に出ていることがあります。

記号の使い方　熟語の上下に【　】がついているものは漢字

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com